

## 《大学院商学研究科 シニア入試》



商学研究科長  
千葉 修身

### 「実践知」の「創造」と「伝承」

－商学研究科が展開する新たな研究支援体制－

#### ■商学研究科の教育

本研究科は、2004年に創立100周年を迎えた「商学のパイオニア」としての本学商学部を基礎とし、1952年に開設され、今日に至っている。

本研究科は、知の「探究」「創造」に専心し、次世代に「伝承」する研究者養成型の大学院である。将来第一線に立つ研究者および高度専門職業人の育成を目的としている点において、本学のビジネス系専門職大学院とは異なるが、修了生は研究によって培われた独自の視点を掲げ、研究機関のみならず、社会の多種多様な分野にその活躍の場を拡大している。このことは、一研究科一専攻を堅持し、①経済、②商業、③経営、④会計、⑤金融・証券、⑥保険、⑦交通および⑧貿易の8系列を配置することで柔軟な専門思考を育む、その特有のシステム設計によるものである。

これら系列間の有機的関連に根ざした幅広い知識と弾力的思考に基づいて、様々な様相を呈するビジネス世界に對峙しようとする点に、本研究科の独自性があるといえよう。

#### ■シニア層受入れの理念

さて、ここでは、本誌の「シリーズ「明治大学の教育」」の一項として本研究科の新たな試みを紹介しよう。「シニア入試」の創設である。この入試制度を設ける動きは2009年に遡る。研究科長 猿渡敏公、専攻主任 北岡孝義、大学院委員 野中郁江の3名で構成された当時の本研究科執行部が素案を提示し、研究科委員会での建設的な議論を経て、2012年度以降の本研究科の教育システムの新機軸をなす理念が確定されたのである（左記枠内を参照）。それは、従来のシニア教育（生涯教育、学びの場の提供）とは一線を画するものである。シニア世代の長年の「商学」分野に関わる）職業経験をアカデミッ

#### シニア層受入れの理念

（2013年度学生募集要項より抜粋）

本学大学院商学研究科では、職業経験豊かな60歳以上の定年退職者を対象として、特別の入学者選抜を実施します。このシニア入試の目的は、長年の職業経験を新たな「実践知の「創造」」に結び付け、次世代に「伝承」しようとする、意欲あるシニア層の研究を支援する点にあります。

クな次元の「実践知」の創造へつなげ、確固たる学術的成果として次世代に残す、その一連の研究作業を本研究科のスタッフが「支援」しようとするプロジェクトである。「実践科学」としての商学研究・教育の歩みは新たなフェーズに差し掛かったといえることができる。

■シニア入試の概要

こうしたシニア層受入れの理念の具体化に向け、シニア入試の実施方法も実にユニークなものとなっている。まず出願資格(左記枠内参照)では、「25年以上の勤務経験」を有していることに加え、入学時には「定年退職者」であることが明記されている。この点は、シニア層であっても入学後は一般学生

シニア入試への出願資格

(2013年度学生募集要項より抜粋)

- ① 次の2つの条件を満たすことが必要です。
    - 大学(短期大学は含みません)を卒業した者又は2013年3月31日までに卒業する見込みの者
  - ② 入学時(2013年4月1日時点)に60歳以上の者
- ※なお、出願者は、シニア入試の理念を実現すべく、同一の職種または業種に25年以上の勤務経験を有する定年退職者であることを原則とします。

と同一のカリキュラムを履修することの意味している。辞書を片手に原書と向き合い、毎回の講義のレジュメを準備する。かつての学生時代が蘇る日々が到来するわけである。

次に、気になる選抜方法は、左記枠内に示すとおりである。「実践知」の創造につなげようとする意欲と素養がシニア本人になくしては、伝承もままならない。さらに、支援するわれわれスタッフの側でも、事前に、個々にその対応力を真摯に精査しておく必要がある。

こうした意味で、選抜方法の主眼は双方のマッチングの度合いの吟味にあるということが出来る。

シニア入試の選抜方法

(2013年度学生募集要項より抜粋)

- 選考は左記(1)および(2)の二段階方式とします。筆記試験はありません。
- (1)書類審査
  - 書類審査では「履歴書」および「研究計画書」を審査対象として、書類審査合格者を決定します。
- (2)面接試験
  - 書類審査合格者には「課題レポート」(2000字程度)の提出を課し、これと「研究計画書」に基づいて面接試験を行います。

■シニア院生の現在

2011年5月開催の説明会に参加された約60名の中から、同年7月には10名のシニアが受験し5名が合格、今春、全員が入学し、充実した研究生生活を送っておられる。次頁には、シニア院生の現在が綴られている。シニアの問題意識は実に高く、意気軒昂であり、われわれスタッフだけでなく、一般学生もまた、その実践経験に根差した見識には大いに刺激と感銘を受けている。「実務家と研究者」の枠組みが、「実践科学」たる商学の新たな研究視角が生まれつつあると感じる日々である。シニア院生(ならびに志願者)の更なる活躍を切に願ってやまない。

今年度の入試について、募集は終了しました。次年度の募集は、2013年5月上旬予定です。詳細は来年4月頃、明治大学商学研究科HPにてご案内致します。

## 《大学院商学研究科 シニア入試》

### 院生の皆さんからのメッセージ



関根 房雄さん(65歳)

新聞社での40年間の編集・記者活動の中で、多くの方から教えていただいたことを整理したいと思い、受験を決めました。今は、明治時代の経済をアジアとの関係の中で見てみよう、関連文献などを苦労しながら読み込んでいます。

ゼミでは、最先端の研究成果や幅広い発想に触れることができ、若い人に交じって授業を受けていると、問題意識も刺激されます。留学生の多さなど驚くことも多く、会社時代とは違った世界を体験しています。シーズンになれば、好きなラグビーの応援に行くのを楽しみにしています。気持ちだけは「前へ」と思いつつ、日々通学しています。



山本 和孝さん(65歳)

スーパーマーケットに入社後、「海外商品輸入のシステム構築」など、短期間での達成が求められる様々な課題について走りながら考え、試行錯誤を繰り返してきました。「ひとつのテーマをじっくり考えてみたい」との思いから、シニア入試にチャレンジしました。

講義を受講する中で教授の皆さんの課題に関する広く深い知識に愕然として、若い学生諸君のしなやかな感性に驚かされたりします。週1回、シニア入試の仲間とそれぞれの体験を情報交換する会を喫茶店で持っており、落ちこぼれないのはこの会のおかげです。これからシニア入試を受験する方にひとつ言えるのは、60歳を過ぎて新しい仲間と出会えることが最大の収穫になるということです。



保浦 卓也さん(65歳)

長年消費財のマーケティングに従事し、2年前に気ままな「隠居」生活に入りました。新聞記事でシニア入試のことを知り、これまで経験したことを見直したいとの気持ちから受験しました。

40数年ぶりの学生生活は正直に申し上げて、まったく想定外の忙しいものになりました。同時に、新鮮な驚きもありました。それは、大学院が与えてくれる新しい視点と、なにより自分の「学びたい」という意欲の強さです。結果として何が得られるかわかりませんが、得られたものをどう社会にお返しするか悩ましいところですが、若い方々にわれわれの熱意を伝えることが、意味のあることではないかと思っています。



寺田 良夫さん(63歳)

勤めていた工場での業務は、原価計算を主体とした経理関係でした。退職後、実務で得た知識が理論上ではどうなのか研究したいと漠然と考えていたところ、シニア入試の情報を知り、応募したところ幸運にも合格し、入学することができました。

現在は会計に関する授業を受講するとともに、勤務経験に基づく研究論文作成の指導を担当教授から受けております。若い人たちと一緒に学び、非常に刺激を受けている日々であり、このような機会は自ら「チャレンジ」しないと得られないと思います。「前へ」行きたいシニアの方は、シニア入試にぜひチャレンジしてみてもいかがでしょうか。



竹内 正実さん(60歳)

航空会社に通算32年8カ月、国内6カ所・海外3カ所で勤務しました。「長年の職業経験を新たな実践知の創造に結び付け、次世代に伝承しようとする」というシニア入試の理念に共鳴し、知的好奇心を満たしたいとの思いもあり、受験した次第です。

今後入学されるシニアの方には、あまり専門にとらわれず、幅広く履修科目を選択することをお勧めします。修士論文に関係なさそうな科目でも、興味のある科目に積極果敢に挑み、仲間と切磋琢磨して学び、心に栄養を蓄えつつ2年間学問を楽しむ余裕ができれば、納得できる論文が作成できると思います。充実した研究生生活を通して、職歴を生かした、僅少でも社会貢献できるような内容の論文が書けるよう、今後も修煉していく所存です。

